



平成23年総代会役員 新穀感謝祭にて(11月23日)

お参りのいろは

★おみくじについて

神社に参拝した際に「おみくじ」を引き、運勢などを占われた方も多いかと思えます。

一般的に「おみくじ」は、個人の運勢や吉凶を占うために用いられているわけですが、種類もいろいろとあり、神社ごとに工夫も窺うことができます。その内容には、大吉・吉・中吉・小吉・末吉・凶という吉凶判断、金運や恋愛、失(う)せ物、旅行、待ち人、健康など生活全般に互る記述を見ることが出来ます。また、生活の指針となる和歌などを載せているものもあります。

そもそも占いは、物事の始めにあたって、まず御神慮を仰ぎ、これに基づいて懸命に事を遂行しようとする、ある種の信仰の表れともいえます。例えば、小正月などにその年の作柄や天候を占う粥占神事(かゆうらし)

んじ)や、神社の祭事に奉仕する頭屋(とうや)などの神役を選ぶ際に御神慮に合う者が選ばれるよう「くじ」を引いて決めることなど、古くから続けられてきました。

「おみくじ」もこうした占いの一つといえます。

「おみくじ」は単に吉凶判断を目的として引くのではなく、その内容を今後の生活指針としていくことが何より大切なことといえます。また神社境内の木の枝に結んで帰る習わしもありますが、持ち帰っても問題はなく、引いた「おみくじ」を十分に読み返し、自身の行動に照らし合わせてみていものです。

★お賽銭について

お賽銭の意味や起源には諸説があります。現在では神社にお参りすると、お賽銭箱に金銭でお供えしますが、このように金銭を供えることが一般的となったのは、そう古いことではありません。

もともと、御神前には海や山の幸が供えられました。その中でも特に米を白紙で巻いて包み「おひ

ねり」としてお供えしました。

私たちは祖先の時代から豊かな自然に育まれ暮らし、秋になるとお米の稔りに感謝をして刈り入れた米を神様にお供えしました。こうした信仰にもとづき、米を「おひねり」としてお供えするようになったのです。しかし、貨幣の普及とともに米の代わりに、金銭も供えるようになりました。

そもそも米は、天照大御神がお授けになられた貴重なもの(おみくみ)を受け、豊かな生活を送ることができるよう祈ったのです。現在でも米をお供えする方もいますが、金銭をお供えすることも、この感謝の気持ちには変わりはありません。

お賽銭箱にお金を投げ入れるところをよく見かけますが、お供物を投げてお供えすることには、土地の神様に対するお供えや、祓いの意味があるともいわれています。しかし、自らの真心の表現としてお供えすることなので、箱に投げ入れる際には丁寧な動作を心掛けたいものです。

月の原日記

大河ドラマ『坂の上の雲』が年末終了しました。

ドラマの主要人物の東郷平八郎は、日露戦争でバルチック艦隊を撃破し、世界一の海軍提督と尊敬を集めていました。

東郷は「天は必ず正義に与(くみ)し、神は必ず至誠(せいせい)に感ず」と言っていました。

『至誠天に通ず』

「誠」とは、自分にとっても他人に対しても嘘偽りのない心。真心です。そして、「至誠」というのは、本気です。その気持ちをもって人生を生きていけば、必ず、その思いは天に通じ、物事は成就するという意味です。



日大芸術学部の皆さん

富の神明さま

発行所 三富富岡総鎮守神明社
社報第7号
〒359-0002 所沢市中富1507
社務所電話 04-2943-1709
宮司宅電話 049-259-2228

新年のご挨拶

三富富岡総鎮守

神明社

平成二十四年の新春を迎へ、謹んで新年の御祝詞を申し上げます。

天皇・皇后両陛下におかれましては、おすこやかに新春をお迎えになられましたこと、慶賀の至りに存じ上げます。

氏子崇敬会の皆様方におかれましては、ご健勝にて新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

昨年三月十一日、未曾有の東日本大震災が発生しました。被災された方々に心

からお見舞い申し上げますと共に、被災地の一日も早い復旧復興を心より願ってやみません。

また、神宮におかれましては、平成二十五年の第六十二回の伊勢神宮の式年遷宮の齋行にむけて、諸事順調に準備が執り進められております。今後とも諸行事が予定されていますが、当社といたしましても参宮団を結成し、それらへの参加も考えております。二十一年に一度の国家の重儀である御遷宮の完遂を何よりも祈念するところでございます。

神明の無辺のご加護をいただき、氏子崇敬者の皆様にとつて、本年が幸多き年になりますことを心よりお祈り申し上げます。

新年のご挨拶



総代会会長
新井 公一

新年明けましておめでとうございます。氏子並びに崇敬会の皆様には、健やかに新しい年をお迎えいただいたことお慶び申し上げます。

昨年三月、未曾有の東日本大震災が発生しました。私達が過去に経験したことのない大きな震災でした。被災された方々に対して心からお見舞い申し上げます。そして、一日も早い復旧復興をお祈り致します。

さて、来年、平成二十五年は、伊勢神宮では六十二回目の式年遷宮がおこなわれます。式年遷宮は二十年に一度、神様の御殿を造り替え、神様をお遷しする日本最大の儀式です。当神明社では、大勢の氏子並びに崇敬者の皆様から、ご奉賛を賜りました。また、平成十九年には、お木曳の行事に宮司をはじめ大勢の氏子の皆様と参加をいたしました。この日は全員、白いはつぴを着て、全国から参加

した崇敬者と共に御用材の御神木を曳きました。そして、勇壮な掛け声や木遣音頭や伊勢音頭にわき返りました。この日の感動は終世、忘れることはできません。いま、当時を振り返り、一緒に参加した大勢の氏子の皆様に懐かしく思い浮かべております。

このたび総代会会長に就任いたしました。八か月経過いたしました。宮司をはじめ大勢の氏子並びに崇敬者の皆様のご指導と、ご協力を戴き神社の諸行事に皆様と共に参加することができました。ここに深く感謝いたしております。

私たち、社団法人の使命として、神社こそ我々日本人の心のふるさとであり、文化であります。日本民族は古くから農耕民族として産土の神社は、春は五穀豊穡を神様に祈願し、秋には豊穡を感謝する祭りを行いました。これからも、我々の産土の神社、神明社の繁栄のため皆様と共に尽力させて戴く所存でございます。

本年も皆様方のご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

平成二十三年総代会研修旅行記

三嶋大社参拝と西伊豆を訪ねて

恒例の神明社氏子総代会の研修旅行が今年も二月二十七日から二十八日に一泊二日の行程で総数十四名の参加を得て行われました。

今回の研修地は、静岡県三島市にある三嶋大社を参拝しました。当日、宮司宅を午前八時に出発し中央道から富士山麓、須走から御殿場、沼津を経て三嶋大社に午前十一時に到着しました。全員で参道を進み、参拝いたしました。

三嶋大社は、古くは伊豆国の総社で旧社格は官幣大社であります。中世以降、武士の崇拜、殊に伊豆に流された源頼朝は深く崇敬し、源氏再興を祈願しました。神助を得て源氏再興となり、鎌倉幕府成立後も三嶋大社を重んじたといわれています。

参拝の後、午前十二時、三嶋大社を出発しました。そして、今日の昼食の食事処、愛鷹路伊豆海に到着し、ここで昼食です。西伊豆

所沢新田氏子総代 新井 公一

の生きのいい魚を美味しくいただき楽しい昼食となりました。

昼食後、車は西伊豆で有名な達磨寺に向かい午後三時に到着し見学しました。日本一の達磨大師坐像が御本尊として本堂内に建立されていきました。そして達磨さんの願い「文句なし、ただ七転び八起きして、働くほかに手なし足なし」と書かれていました。人生の教訓として大変、敬服いたしました。

そして、午後四時、達磨寺を後にしました。次ぎに向かったのは今夜の宿です。宿は、風雅、風流の湯の宿、清流に到着しました。立派なホテルで部屋から海の絶景が素晴らしく、汐の香りがやさしく心安らく時間が流れました。そして夕食、皆様と楽しく懇談をして楽しい一夜を過ごすことができました。

翌日は、ホテルを午前九時に出発して象牙美術宝庫を見学し、お土産の里で休憩し、次の昼食の食

★日本の神話

『八俣の大蛇』

埼玉県神社庁では、日本の神話を多くの方々に知っていただくことと、毎年、神話カレンダーを作成しています。今年も『八俣の大蛇』です。

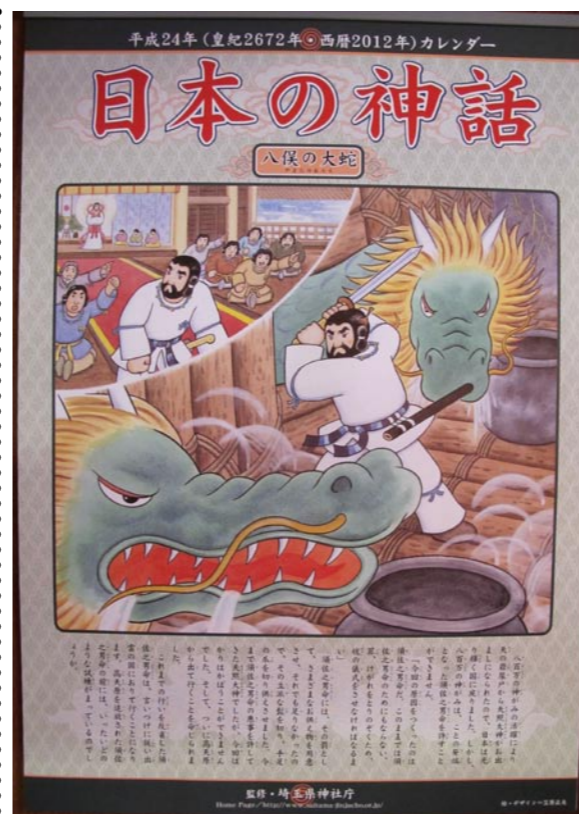
さて、どんなお話でしょうか・・・。

高天原を追放された須佐之男命は、出雲国の肥河（島根県斐伊川）の上流の鳥髪（とりかみ、現奥出雲町鳥上）に降り立ちました。川上から箸が流れてきたので、川上に人がいると思って川を上ってみると、美しい娘を間にして老夫婦が泣いていました。その夫婦は大山

津見神の子の足名稚命と手名稚命であり、娘は櫛名田比売といいました。

夫婦には八人の娘がいましたが、毎年、高志から八俣の大蛇という八つの頭と八本の尾を持ち、目はホオズキのように真っ赤で、背中には苔や木が生え、腹は血でただれ、八つの谷、八つの峰にまたがるほど巨大な怪物がやって来て娘を食べてしまいました。

今年も八俣の大蛇のやって来る時期が近付き、このままでは最後に残った末娘の櫛名田比売も食べられてしまうので泣いているのでした・・・。



社務所にて頒布しています。ただし、部数に限りがございますのでご了承下さい。

事処、元箱根「絹引の里」に到着し、美味しい蕎麦をいただきました。そして、当日は朝から降雨のため、予定を変更して帰途についたものでした。

旅行は名譽宮司をはじめ大勢の氏子の皆様と神社を参拝しました。みんな和氣藹々、楽しい研修旅行でした。そして、一路全員無事に帰着いたしました。



総代会研修旅行 三嶋大社にて